注(14)　桃生郡の三浜（釜谷浜・尾崎浜・長面浜）と十二浜（名振・船越・荒浜・大須・桑浜・立浜〔たつはま〕・大浜・小島・明神・雄勝・水浜・分浜）との名数的な総称であった。このうち、釜谷浜だけが現河北町に入っており、その他の14浜は現雄勝町に入っている。なお現雄勝町は、もと十五浜村と称した。

注(15)　名振。

資料　政宗記（伊達成実）

貞山公治家記録巻之39下

政宗公御名語集（「仙台叢書」第１巻の内。小倉博編単行本）

文武名将伊達政宗卿詩歌要釈（鈴木栄一郎・千坂庸夫）

54.　「養種園」の名称

問　仙台市一本杉の養種園の園名は、どのような理由で名付けられたものでしょうか。

答　「養種園」の園名は、現在の事業内容からはかなり理解し難いものになってしまいました。そこで、命名の理由を知るためには、明治(1)の創業時代に遡って、当時の資料に当ることをしなければなりません。

養種園は、伊達邦宗が、純良な種子・種苗を育成してこれを頒布し、郷土の農業生産の改良発展を図る目的で、一本杉邸(2)内に私費を以て創設したもので、園名も、このような趣旨を最も適切に表現するものとして自ら(3)命名したものであります。「伊達家史叢談(4)」14（伊達邦宗）の中に、伊達邦宗自身が執筆した、次のような記事があります。

『養種園〔前略〕明治三十三年ノ秋、家政協議員富田鉄之助翁等ト相謀リ、玉利（喜造）農学博士ノ指導ヲ受ケ、農園ヲ仙台市保春院丁ニ開キ、養種園ト名ヅク(5)、其ノ意種子、種苗ヲ改良スルニ在ルヲ以テナリ、其ノ播種スル所ノ種子種苗ハ、邦内ニ限ラズ、遠ク欧米、支那諸国ニ及ビ旁搜博採〔ぼうそうはくさい〕シテ良種ヲ得、実用ヲ主トシ精撰ヲ期セリ、着手以来数年ニシテ、園圃〔えんぽ〕狭隘ヲ告ゲシカバ、更ニ園域ヲ拡張シテ、四町九反七畝〔せ〕二十九歩トナス、四方ノ人士、来観踵〔きびす〕ヲ接スルニ至レリ、……明治三十三年、本園設立以来十有五年(6)、穀菜果樹ノ種子種苗ヲ改良シ、之ヲ四方ニ頒チ、略ボ素願ヲ償フヲ得、且ツ他ノ事情モアリテ、大正十三年十月、姑〔しばら〕ク本園ヲ閉チテ事業ヲ中止セリ、会々〔たまたま〕宮城県農会斯業ヲ継紹〔けいしょう〕スルノ意アリ、乃チ本園ノ土地家屋一切ヲ挙ゲテ貸付シ、其ノ租ヲ収メズ、以テ其ノ発達ヲ期セリ、此レ亦タ国恩ノ万一ニ報ユルノ微意ナリ、』

『設立ノ趣旨

当園設立ノ趣旨ハ、専ラ東北地方農産物ノ改良発達ヲ図ルニアリ、之ヲ図ルニハ、必ズ先ヅ純良ノ種苗ヲ得ルヲ要ス、此ニ於テ、博ク良好ノ穀菽〔こくしゅく〕蔬菜果樹等ヲ撰択シ、内国ハ勿論、清韓及ビ欧米諸国ヨリ購入シテ、之ヲ試作シ、地方ノ風土地味ニ適シ、良好ノ結果ヲ得タルモノハ、之ヲ農会等ニ寄贈シ、或ハ希望者ノ求ニ応ジ、且ツ栽培ノ方法ヲ説諭勧誘シ、以テ地方ニ普及セシメンコトヲ企図ス、是レ養種ノ園ト名ツクル所以ナリ、』

なお、養種園の功績について、「仙台市史」第2巻は次のように記している。

『昭和十八年に旧伊達家の直営農場であった南小泉一本杉の養種園が、仙台市の管理に移った。同園は明治三十三年四月東北農業の改良発達を図る基礎として、優良種苗の獲得を目ざして国内は勿論、広く支那大陸欧米からも各種の種苗を入手して、これを地方風土に適するよう改良したものを一般に普及せしめる目的で、伊達邦宗が開設したもので大正三年十月県の懇望で一時県〔県農会〕の管理に移り、昭和二年十一月契約期限に達して再び伊達家の経営に復していたものが、市の管理となったものである。これ迄既に五十年の歴史を経て、その間数々の功績を残しているのであるが、その内最も顕著なものは仙台白菜の改良により今日の声価あらしめたことである。即ち大正四年松島湾内の孤島に結球白菜の純良種子採種場を設けて、造成採種したものを県内に配布奨励したものである。これについては昭和二年再度伊達家の経営に移ったのちにも、七郷村荒浜に結球白菜の原種室を設けている。この外開園以来園芸技術を修得せしめる目的で見習生の養成をなし来り、昭和六年にはこの制度を改めて養成期間を一カ年とし、寮舎を設けて入舎せしめ、食費も園負担として年々五名ずつ採用養成することとした。養成者は開園以来昭和十二年頃までに五十名に達しているが、この人達が各地方に分散して夫々指導的位置についているのであれば、この効績も大なるものがあるに違いない。』そして、養種園技師として大きな業績を残した人に、沼倉吉兵衛[7]・吉野平八[8]がいました。

注(1)　「養種園条例」（昭和41年3月30日仙台市条例第2号）によると、園芸に関する試験研究・園芸技術、経営の指導・園芸作物の展示・園芸作物の分譲、斡旋等の事業を行うとある。

注(2)　p. 115 注(2)参照。

注(3)　もと、佐々豊前下屋敷〔現ウルスラ高校敷地〕、宮床伊達・不動堂後藤〔現養種園敷地〕など一帯〔安政3～6年（1856～59）間製作「安政補正改革仙府絵図」に現われている〕。明治10年頃伊達家仙台屋敷となった。邸内に杉の大木があり一本杉と呼ばれ、地名ともなった。ウルスラ高校に譲渡されてからも、邸宅は校舎の一部として使用されていたが、撤去されることになった。昭和58年12月1日市指定有形文化財となっており、市が解体材を保管し、茂庭の「茂庭荘」隣りに移築復原されることになった。

注(4)　p. 115 注(1)参照。

注(5)　p. 24注(3)参照。

注(6)　町・反（段）・畝〔せ〕・歩〔ぶ〕は土地面積の単位。1町＝10反、1反＝10畝、1畝＝30歩。1町は約99.17アール、1反は約991.7平方メートル、1畝は約99.17平方メートル、1歩は約3.306平方メートルで1歩は1坪に同じ。

注(7)　「仙台市史」第7巻に次のように記してある。

『沼倉吉兵衛昭和十八年四月二十三日八五

仙台白菜は宮城県の特産物として全国的に声価をもつ野菜であるが、この野菜の栽培が普及するようになったのは沼倉吉兵衛の努力によるものである。彼は登米のひとで、東京に出て駒場農学校に学び、宮城県農学校の教師となった。彼が結球白菜の栽培研究をはじめたのは、日清戦争で出征した第二師団参謀長が芝罘〔チーフ〕白菜の種子をもちかえり、それを農学校に寄贈したことによるものである。彼はその種子をもとにして試作を続けてみたが、最初の二年は成功しなかった。採種方法に欠点があった為である。彼は農学校を退いて、伊達家養種園の技師にむかえられてからも研究を続け、採種方法に検討を加えたり、種子を原産地の芝罘（中華民国山東省）からとりよせたりして、大正三年になって二十年の苦心がむくいられて、品種の改良に成功し、現在の仙台白菜をつくりあげることができた。昭和十八年に仙台市に移管された養種園に於いて、仙台白菜の改良を主要な研究課題にえらんでいるのは〔昭和28年の時点で〕彼の研究の伝統をひきつぐものといえるであろう。』

注(8)　「仙台市史」第7巻に、

『養種園技師として、とくに仙台市附近の野菜の生産に寄与した吉野平八（大正十一年二月二十六日七一）もまた忘れてはならないひとであろう。彼は三河島（東京都）の出身で、伊達宗基〔その後継邦宗が正しい〕が養種園を開設するにあたって（明治三十三年）富田鉄之助などの推挙によって彼を技術者としてむかえたことによるのである。盛岡高等農林学校講師、宮城県農会技師、宮城県農事試験場園芸主任をつとめたことがある。亘理郡の荒蕪地開墾や原町の野菜の増産などは彼の指導によるものであった。「最近蔬菜栽培法」の著書がある。』とある。また、「仙台先哲違人録」（仙台市教育会）に詳しい伝記と年譜が載っている。

資料　伊達家史叢談14（伊達邦宗）